

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32710

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520336

研究課題名(和文) 戦後「イングランドの状況」と小説

研究課題名(英文) The Post-War "Condition of England" and the Novel

研究代表者

菅野 素子 (Sugano, Motoko)

鶴見大学・文学部・講師

研究者番号：10586176

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は「イングランドの状況」という時代状況の言説と小説との関係をオイルショック後の1975年から英国が福祉国家としての経済社会構造の大変革を経験した1990年までの15年間にわたって研究したものである。「イングランドの状況」は17世紀後半に始まる産業化の弊害として生ずるネイションの分断に対する懸念の表明だが、現在では一般的にも特殊な意味でも使用される。そこで当該研究期間に発行された新聞雑誌などジャーナリズムにおける一般的な用法および同期間に出版された小説を調査の対象とし、その結果を比較検証した上で関連づけた。こうした再検討は当該期間における「イングランドの状況小説」の再構築につながった。

研究成果の概要(英文)：This research explores how the notion of "condition of England" can be applied to novels written between 1975 and 1990, a period in which England underwent considerable reform in its welfare system. For this project, extensive research was conducted on both novels from that period as well as articles from mass-media, such as newspapers. The result of this research permits a new definition of the "condition of England" novel, and suggests a need to re-map the field of the "condition of England" novel.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：イングランドの状況 イングランドの状況小説 産業小説 二つの国民 イングランド北部

1. 研究開始当初の背景

「イングランドの状況小説」(以下、状況小説)とは、端的に言えば「イングランドの状況」(以下「状況」)を扱った小説のことだが、小説の一分野として知られている一方で、研究上の問題点が多い。これを厳密に定義し、対象となる小説テキストの範囲を確定しにくいためである。この不確定さを補うため、研究対象を特定の期間に限定して歴史化するだけではなく通史的にみる視点が、多くの場合併用される。

「状況」というタームが使われるようになったのは19世紀前半のことである。産業化の負の影響を懸念した英国の文筆家 Thomas Carlyle はこの用語によって、急速な産業化の帰結としてネーションが分断の危機にあり、階級間の経済的格差や貧困の問題が深刻化していること、つまり「二つの国民」(Two Nations)を生み出している「新しい状況」を憂慮した。こうした危機感は20世紀初頭に政治家で文筆家の C. F. G. Masterman が *The Condition of England* (1909) においてネーションの現状を考察した際にも引き継がれていた。戦後は Raymond Williams が *Culture and Society* (1958) において19世紀の状況小説から代表的なものを選び「産業小説」(industrial novels)と分類した。Williams は産業資本主義の問題視する当の小説家もまた中産階級出身であり、労働者階級を概念的にも小説の言説としても「封じ込める」という意味で、資本家階級と共犯関係にあると指摘した。つまり Williams は貧困や階級の問題は「イングランド」の問題であるよりも「産業」の問題であると読んだのである。

その後、1980年代にふたたび「状況」が議論されるようになる。サッチャー政権下では戦後の福祉国家に大幅な修正がなされ、自由競争と自助努力のかけ声の中で貧困や経済格差が改めて深刻化した。そのような状況で書かれたのが先行する状況小説テキストを読み直し、綿密な間テクスト性を構築した David Lodge の小説 *Nice Work* (1988) である。

Lodge の小説はリベラルヒューマニストによる読み替えと考えることができる。だが、文学をイデオロギーから切り離そうとするこうした動きの一方で、1980年代はポストコロニアル理論やナショナリズム研究が優れた研究成果を残した時期でもある。こうした流れを合わせて読むとき、1980年代の「新しい状況」とは何なのか、そして小説とどのような関連が見出されるのか。小説や批評だけではなく、新聞雑誌を含めて包括的に検討することにより、そのダイナミズムの一端を解明することができるだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、課題の研究対象期間である1975年から1990年における「イングランドの状況」(「状況」)と小説との関連を探ることである。それにはまず、イングランドと

いう固有名詞ならびに「状況」が示す内容を検証しなければならない。英語の England や English は時代や使い方によって、広義にはイギリスや英国と同じような意味で、狭義には英国の一ネーションとして使われる。また、「状況」は一般的な文脈でも特殊な文脈でも使用されるタームで、双方の用法が混在している。まずは、こうしたタームの使われ方を整理する必要がある。

このために、以下の二種類の調査を行う。一つは新聞雑誌記事における「状況」の用例を調査し、この用語がどのような文脈で使用されているのか、実際何を指示しているのかを検討する。二つ目は小説の分析である。小説の分析では「状況」という用語がそのまま使用されることはまれなので、焦点を絞り、どのような政治経済的もしくは文化的状況が議論されているのかを分析する。

小説が社会を、そして時代の状況をいかに描くかという問題は、小説が登場した当初から常に作家や批評家、そして読者の関心事であり続けてきた。そもそも状況小説は時代の問題を小説の形で検討することから始まったジャンルであり、テキストの外の世界と何等かのつながりを現在でも保っていることが期待される。そこで、「状況」の一般的な用例を新聞雑誌などのジャーナリズムの文章に求めるとともに、そこで得られた結果と小説の描く「状況」とを結びつける。小説が取り上げる経済社会もしくは文化的状況と、小説テキストの外側で「状況」として議論されるものとの関連づけて比較検討するのが本課題の目的である。

本研究の研究対象期間に生成されたテキストの読解にもっとも関連の深い批評理論の分野は、ポストコロニアル批評およびナショナリズム論である。「状況」を考察するにあたって、こうした批評のトレンドと状況小説の系譜を接続することも、本課題の目的である。

3. 研究の方法

本研究は基本的には文献研究である。以下の三種類の文献を調査する方法を併用した。まず、(1)調査期間の「イングランドの状況」(「状況」)を探るために、この用語を用いた新聞雑誌記事の内容を分析した。次に、(2)時代の代表作と考えられる各文学書を受賞作最終候補作における「状況」を調査した。そして、(3)「状況」が小説のサブジャンルを形成する歴史的な過程を文学史の文献に調査した。

(1) 新聞雑誌記事の調査

全文検索が可能なデータベースを使用し、必要に応じて現物にあたった。調査対象としたのは新聞4紙 (*The Times*, *The Daily Telegraph*, *The Guardian*, *The Independent*)、雑誌3誌 (*The Economist*, *The New Left Review*, *The New Statesman*) である。

(2) 小説の調査

ブッカー賞の候補作と受賞作、ホイットブレッド賞受賞作、サマセット・モーム賞の受賞作を対象とした。文学賞を受賞した小説すなわちネイションを代表する小説ではないが、人の目に触れやすく新聞雑誌等でも話題になりやすいため、時代の「代表的」な作品としての意味を持っている。またホイットブレッド賞とサマセット・モーム賞は、新しい書き手の登竜門でもあることから、「新たな状況」の評価の場として妥当なものである。実際の調査にあたっては、国内図書館に蔵書がない場合は、英国の図書館から取り寄せ、あるいは英国の図書館にて調査を行った。

(3) 文学史の調査

主に英国内の図書館の蔵書、特に大英図書館の資料を調査した。その際、次の2点に注目した。まず、「状況」というタームもしくは状況小説が文学史に登場する時期の確定である。次に、状況小説が他にどのような小説のジャンルに分類されてきたかの調査である。これは状況小説として、すなわち小説テキストのグループとして考察するための裏付けとなる調査である。

4. 研究成果

助成を受けた期間中には、本課題を通じて得られた知見をまとめ、雑誌掲載論文（日本語論文3件、英語論文1件）および学会での研究発表2件（海外2件）の形で発表した。これらはいずれも、戦後「イングランドの状況」（「状況」と小説との関係を作品論として具体的に検討したものである。本課題研究対象期間である1975年から1990年までの「状況」と小説との関係の一端を明らかにできた。その理由を以下に述べる。

雑誌掲載論文の主なものに「1986年の産業小説—Malcolm Bradburyの*Cuts*とDavid Lodgeの*Nice Work*」、「北へ、その先へ—Caryl Phillips, *A Distant Shore*における語りとイングランド北部」および「執事の二枚舌—Kazuo Ishiguroの*The Remains of the Day*を日本語で読む」がある。「1986年の産業小説」においては、1986年の英国産業振興年という実際の政府施策が実施された年を舞台にした2本の小説を取り上げ、「状況」を産業主義の観点から読み解いた。その際、新聞雑誌における英国産業振興年の記事の内容分析を含めて、小説テキストの内外の事象を検討した。この論考を通じて「産業年」に対して危機意識を共有する小説をグループ化することができ、1980年代にも一連の小説群として状況小説を構想することが可能であることが検証された。「北へ、その先へ—Caryl Phillips, *A Distant Shore*における語りとイングランド北部」においては、この小説におけるイングランド北部の表象を検討した。当該小説は本課題の研究対象期間からは外れる2003年の出版であるが、状況小説において産業を代表するイングランド北部の状況を見直すとともに、状況小説とは

ば同義語「二つの国民」という概念を補足する論考として発表した。

「執事の二枚舌—Kazuo Ishiguroの*The Remains of the Day*を日本語で読む」においては、これまでほとんど議論されたことのない、日系英国人作者イシグロの書き手としての立場を、作品内で使われる「イングランド」(England)というネイション名の翻訳の問題を通じて提起した。日本語では「イギリス」と翻訳されているが、英語の固有名詞Englandは時代の節目にあって、英国と同じ意味でも、英国の中の一つのネイションとしても読める。このような意味の二重性を利用して、作家イシグロが「イングランド人」(the English)という固定されたネイション観に対してゆさぶりをかけていると論じた。なお、本論考は学術論文ではあるが、大学で学部生の講義にも使用できるように書いたものである。実際に研究代表者が担当していた講義でも教材として使用した。本課題の成果を、アカデミアだけではなく一般の読者に広く還元することができたと信ずる。

この他に、海外の学会で2度の研究発表を行った“Nishizuru, Chapei, and…: The Representation of Crisis in Kazuo Ishiguro's Novels.”(2013年12月)では、『浮世の画家』(*An Artist of the Floating World*)および『わたしたちが孤児だったころ』(*When We Were Orphans*)における貧困層の居住地やスラムに注目して作品を読み直した。これまでの状況小説において貧困の問題はイングランド国内の舞台で議論されてきた。しかし両作品で描かれたアジアの貧困地帯は作者が実際に経験したのではなく、英国での経験と想像の産物と考えるのが妥当である。だが、こうした解釈は日本の歴史や文化にアクセスする機会の少ない海外の研究者には難しいため、本発表はイシグロという作家および1980年代の状況小説の理解に資するものであったと考える。また、社会科学系の研究者が多く集まる学会での発表であったため、本研究課題を他の分野の研究と結びつけることができた。さらに、“Steel and Speech: The Representation of an 'Old Railway Viaduct' in Caryl Phillips's *A Distant Shore*.”(2013年7月)は文化遺産を学際的に研究する学会にて研究発表を行った。これにより、「状況」と小説に関する課題が文学という学問領域にとどまることなく、様々な学問領域との接点を持ちつつ発展可能な研究であることが確認された。

いずれの研究成果も、戦後の「状況」と小説との関連を問い直し、その有効性を再確認するとともに、それが小説において議論される新たな可能性を提示することができた。

本助成金により、戦後の「状況」と小説との関連を研究する一定の枠組みはできた。今後は、課題期間中に調査した数多くの小説テキストを取り込む形で、小説のサブジャンルとしての範囲を見極めることを課題とした

い。その際には研究成果をアカデミアにとどまらず、広く一般に伝えることを念頭に置いて進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 菅野素子 「1986 年の産業小説—Malcolm Bradbury の *Cuts* と David Lodge の *Nice Work*」『鶴見大学紀要 第 2 部外国語外国文学編』第 51 号(2014), pp. 47-66. 査読なし
- ② Sugano, Motoko. “Nishizuru, Chapei, and so on: The Representation of Crisis in Kazuo Ishiguro’s Novels.” *International Journal of Science and Humanity*. Vol.5 (2014), pp. 116-119. 査読あり
- ③ 菅野素子 「北へ、その先へ—Caryl Phillips, *A Distant Shore* における語りとイングランド北部」『英文学』第 98 号(2013), pp. 37-50. 査読あり
- ④ 菅野素子 「執事の二枚舌—Kazuo Ishiguro の *The Remains of the Day* を日本語で読む」『多元文化』第 1 号(2012), pp. 21-50. 査読あり

[学会発表] (計 2 件)

- ① Sugano, Motoko. “Nishizuru, Chapei, and…: The Representation of Crisis in Kazuo Ishiguro’s Novels.” 2013 2nd International Conference on Humanity, Culture and Society. (マレーシア、クアラルンプール, Ambassador Row Serviced Suites, 2013 年 12 月 29 日).
- ② Sugano, Motoko. “Steel and Speech: The Representation of an ‘Old Railway Viaduct’ in Caryl Phillips’ s *A Distant Shore*.” Rust, Regeneration, and Romance: Iron and Steel Landscape and Cultures. (イギリス, Ironbridge International Institute for Cultural Heritage, 2013 年 7 月 11 日).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅野素子 (SUGANO Motoko)

鶴見大学・文学部・講師

研究者番号: 10586176

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし